



ストックホルミア2019に 参加して

大沼幸雄



写真1 会場のウォーターフロント・
コンgresセンターには幟が並ぶ

ロンドン王立郵趣協会の一大イベント

5月27日から6月4日までの1週間、家内と一緒にストックホルムで開催されたストックホルミア2019に参加しました。これはロンドン王立郵趣協会 (Royal Philatelic Society of London-RPSL, 以下、ロイヤルと略) の創立150周年記念大会のことです。会場はストックホルム市の中心街にあるウォーターフロント・コンgresセンターで、前日の内覧会をのぞき、正式会期は5月29日(水)から6月2日までの5日間でした。

急遽セミナー講師として参加

Bulletin-1 によれば、非競争展と競争展があり、競争展にはチャンピオン・クラスはないこと、更に参加費用が約9万円弱とかなり高額なこと、又スウェーデンは一般に物価水準が高いこともあり、小生は、見送りの方針を決めていました。年が明けて間もなくFIPのテーマティック委員長のスハドルクさんからメールがあり、私が以前にTC-NEWSに寄稿したテーマティック作品制作の戦略論を、今回のセミナーで説明してもらえないかとの依頼が来ました。折角のお話でもあり、方針を転換して急遽1週間だけストックホルムに出かけることにしました。演題は「テーマティック作品の

分析的手法」(Analytical Approach toward Thematic Philately)として、昨年3月のミニペックスのカンファレンスの内容を更に発展させたものです。英文資料は下記URLに載せましたのでご覧ください。

<http://beethoven-philately.com/>

会場はストックホルム中央駅に隣接の 至便な立地

欧州への長旅が負担となる年齢となったので、欧州まで一番短いヘルシンキへ飛び、そこで一休みしてストックホルムに入りました。エコノミークラスの一番前の席を約1万円の追加料金で予約したので案外疲れの出ない旅でした。この席ですと足をゆっくりと延ばせるメリットがあります。山田洋二の「家族はつらいよ」是枝裕和の「万引き家族」など見ているうちにたちまち約9時間でヘルシンキに着き、そこで乗り換えると、わずか45分でストックホルムのアーランダ空港に到着しました。

空港からは、ネットで予約済みの市内行きの電車があり約30分でストックホルム中央駅です。オフィシャル・ホテルの「Raddison Blu Waterfront Hotel」は、中央駅から歩いて数分程度。会場とはとなり合わせで最高に便利な立地です。東京でたとえると、まるで丸ビルのあたりに会場とホテルがある感じです。しかもホテルと会場はドアで通じており、関係者は鍵ひとつで出入りできます。



写真2 威容を誇るストックホルム中央駅

華麗なソーシャル・イベントの数々

今回の記念行事は、目玉の切手展を中心に、ディーラー・ブース(46社)、セミナー、パーティがこのコンgresセンターの2階から7階の各レベルの会場で開かれ、さすがに世界で最も歴史と伝統を誇るロイヤルの創立150周年大会に相応しい一大イベントとなりました。また1891年当時のノーベル火薬工場を改装したレストラン「Winterviken」でのクラブ・ディナー、中世の沈没船「VASA」号を引き上げた博物館での約700名が参加してのパルマレスなど、ソーシャル・イベントも華やかに繰り広げられました。



写真3 ノーベル火薬工場跡でのクラブ・ディナー



写真4 クラブディナー直前のパーティでベストFIP会長と共に

ひしめきあう超ハイレベル作品

正式オープンの前日には、午後3時から内覧会がありロイヤルの会長マセリス氏の歓迎の辞に続いて、今回の大会全体のオーガナイザーのジョーナス・ヘルストローム氏のスウェーデンへの歓迎の挨拶がありました。早速テーマチック部門の競争展を見に行ったところ、マース氏(ドイツ)の「数学」、マジール氏(イスラエル)の「土地耕作」、シユミット

氏(ドイツ)の「ローランの騎士」、など超ハイレベルの作品がひしめきあっており、まるでチャンピオン・クラスの戦いの様相です。マジール氏に「チャンピオン・クラスが無いと思



写真5 展示委員長ヘルストローム氏の挨拶に聴き入る内覧会入場者たち

い、出品しなかったのだが・・・」と言ったところ「これはFIP展ではないので、チャンピオン・クラスも出展できる。ここで良い点数をとれば、2020年のロンドン世界展では、それが評価のベースになるので」とのこと。とまれ審査員は甲乙をつけるのに苦しむだろうなと想像しました。

会場のレベル2(2階の意)では、競争出品(郵便史、航空、テーマ、絵葉書、オープン)が展示され30名程度収容できる会議室が5部屋、レベル3はロイヤルはじめ諸団体のブース、レベル4は、競争出品の3部門(伝統、ステーションナリー、レベニュー)の展示、ディーラー・ブース(合計46社)、レベル5はコート・オブ・オーナーとスポンサー専用の「ストックホルミア・クラブ」、レベル6-7は、1500名を収容できる大講堂(オーディト



写真6 ロイヤル会員の作品の粋の並び会場

リアム)です。このうち大講堂のフロアを除き全てのレベルをつなぐエスカレーターが忙しく作動しており移動にはとても便利な構造です。しかし余程しっかりと案内図を頭に入れておかないと迷子になります。大小合せると合計9室の会議室で、講演会、会合、セミナーが毎日間をおかず開催されており大いに賑わっていました。

ファンファーレと共に スウェーデン国王が登場



図7 スウェーデン国王の開会挨拶、
右は寄贈されたチョコレートの王冠

正式オープンの初日の11:00に大講堂で、スウェーデン国王出席のオープニング・セレモニーがあり、早めに良い席を確保しました。ダミアン・レーグさんが席に来られて「タイには行けなかったけれど、グランプリドナーの候補になったそうですね。テーマチック作品では初めてのことでおめでとう」とお祝いの言葉をくれました。私にとっては、欧州の音楽切手展で何度も指導を受けた先生であり、欧州では、今でも、彼のコメントを御神託のように聴いている人が多いので、この言葉にある種の感慨を覚えました。レーグさんが、世界展の結果をフォローしているのは当然でしょうが、タイでGPHの候補に上がったことは、欧州郵趣連盟(FEPA)モレノ会長が、私の写真入りで、連盟のHPに載せてくださったので、それを見たのかもしれませんが。やがてファンファーレが鳴り、スウェーデン国王カール16世グスタフが会場に姿を現しました。ロイヤルのマセリス会長の「何故スウェーデンになったか」と言うユーモラスなスピーチのあと、王冠をかたどった巨大なチョコレートが国王に贈られ、続いて国王の挨拶がありました。今回のイベントのパトロンは、英国女王エリザベス2世とスウェーデン国王ですからやはり「ロイヤル」の名にふさわしいオープニング・セレモニーとなりました。

郵趣のウィンブルドン化現象

英国の最も伝統のある団体の150周年記念大会がなぜスウェーデンなのかという疑問がわくのは当然のこととされます。Bulletin-1の「なぜスウェーデンか」によると、第一に、ロイヤルの会員構成が、国内が500名、海外が1400名と海外勢がはるかに多くなったこと、第二にスウェーデンのロイヤル会員は80名と過去10年間で約倍増したことなどが挙げられています。しかし親しい知人に尋ねたところ、スウェーデンの大資産家のグスターフ・ダグラス氏が億円単位の巨額の寄附をしたからとのこと。ロイヤル会長マセリス氏は、ベルギーの事業家ですから、テニス同様に郵趣界もウィンブルドン現象が起きている印象です。現在、グスターフ・ダグラス氏は、数億円する世界的に有名なスウェーデンのエラー切手「Treskilling Yellow」(3シリング・パンコの黄色)を所有しており、今回それがコート・オブ・オナーの目玉となっていました。



写真8
数億円のエラー切手、
3シリング・パンコの黄色

「有志竟成」の色紙 - ノーベル博物館

5月30日は、少し時間の余裕があったので、旧市街のガムラスタン島へ出かけノーベル博物館を見学しました。ノーベル平和賞を受賞したキング牧師の特別展開催中で、写真のみならずキング氏の迫力ある「I have a dream」の演説をイヤフォンで聴くことができました。また本庶佑さんの「有志竟成(ゆうしきょうせい)」と書いた色紙が印象に残りました。この島では、宮殿の衛兵の交代、郵政博物館の見学もできました。博物館にも「Treskilling Yellow」拡大図が鎮座してあります。



写真9 本庶佑さんの色紙

	TR	PH	PS	REV	AER	TH	OP	PP	LIT	
LARGE GOLD	23	32	3		2	5			5	70
GOLD	28	39	4	1	2	2	1	1	18	96
LARGE VERMEIL	19	31	6	1	7	5	6		21	96
VERMEIL	15	15	2	2	1	3	1	2	28	69
LARGE SILVER	3	6			2	3	5		17	36
SILVER		2			1	1	3		8	15
SILVER BRONZE	1	1								2
BRONZE							1		1	2
CERTIFICATE						1				1
	89	126	15	4	15	20	17	3	98	387

資料12 部門別の審査結果一覧

Thematic Philately」に選ばれました。「ストックホルミア2019大賞」の選定方法は、審査員27名が、各人の持ち点20点を、8点、6点、4点、2点に分け、順位を決めて4部門に投票し、合計点が一番高い部門の「Best」に大賞が与えられます。その結果、郵便史「分裂国家-南北戦争が郵便に与えた影響」（166点）を制作したDaniel Ryterband氏が「ストックホルミア2019大賞」を受賞し、第二位・伝統部門「米国の州発行の一番切手」（118点）、第三位・文献部門「Perkins Bacon BG Line-Engraved Postage Stamp Printing 1840-1846」（70点）、第四位・テーマティック部門「数学」（58点）、次いでステーションナリー部門「スウェーデン初期のステーションナリー1872-1897」（48点）となりました。



写真13 部門ベスト賞のマース氏（左）とロイヤル会長のマセリス氏

「天才」ジョーナスの大活躍

全般的な印象ですが、FIPの世界展の持つピリピリした緊張感はありません。LGが

70作品もあることから窺えるとおりロイヤルのトップクラスの作品が勢揃いして150周年記念を皆で祝う一大イベントという印象です。このイベントのためにジョーナス・ヘルストローム氏がリーダーとなり18名のチームが、5年前から着々と準備を進めていたようで、一部の噂では「ジョーナスは天才だ」とのことでした。参加者は、欧州が多く、北米、中南米、アジ

アは影が薄く、中国人、韓国人は殆ど誰にも出合っておりません。1週間後に武漢での世界展が控えていたことも理由と思われました。日本からの参加者は、審査員の佐藤浩一さん夫妻、吉田敬さん、菊池恵美さん、山田廉一さん、和田文明さん、菊池達哉さんと我々夫婦だけで10名足らずの参加でした。

日本の競争部門出品は、1) 伝統「フランス1849-62」有吉伸夫（8フレーム）G(94点)、2) 伝統「目打ち導入以前の世界の一番切手」吉田敬（5）G（90）、ステーションナリー「1943年マレイ4セント葉書」菊池恵美（1）LV(85)、文献部門、単行本2冊、雑誌1冊と少なめです。

北欧最古の大学町ウプサラへ

最終日の6月2日（日）は、故あってストックホルムから北へ電車で40分ほどのウプサラ大学の見学に参りました。晴れ上がった日で、沿線に広大な菜の花畑が広がりリラックスした気分の旅となりました。大学の本部



写真14 大学町ウプサラのフリーソン河畔の緑陰から大聖堂の尖塔を望む

は、大聖堂の裏手にあります。1477年創設で北欧最古の大学です。人口15万人のうち学生が2.4万人ですから、こじんまりした大学町です。最古の学部は神学で、それ故、最初の建物は、大聖堂の裏にできたのですが、今では、町全体に各学部が散在してありました。目的の経済学部へは、学生らしい若者が来ると片端から訊いてやっとたどり着きました。大きな公園の中の近代的建物が経済学部で、中に入ると日曜日にもかかわらず6~7人のグループの学生が数ヶ所でパソコンを使いながら議論をしていました。何かとても自由な雰囲気を感じました。

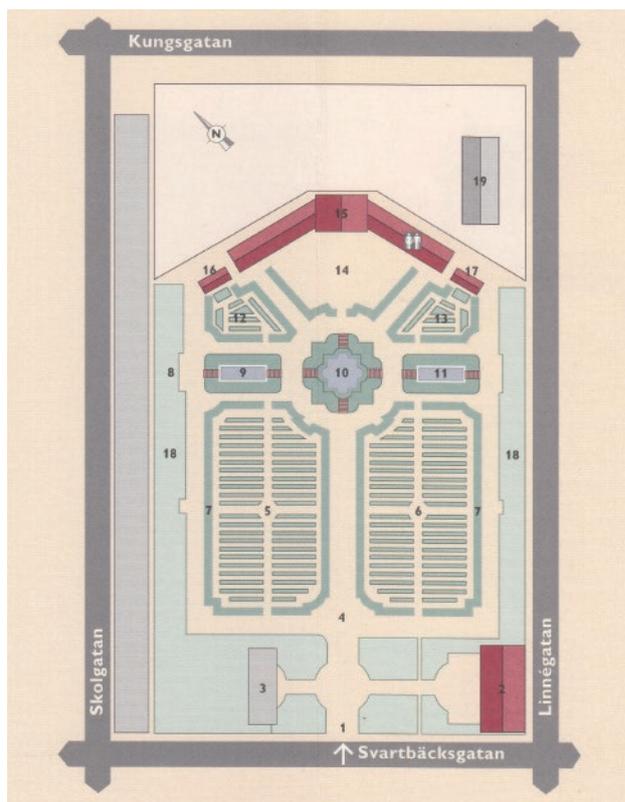
リンネ博物館－整然たる植物園

ウプサラは、卒業生の中から15名のノーベル賞受賞者を輩出しています。アフリカで飛行機事故のため非業の死を遂げた「平和賞」のハマーショルド国連事務総長は、同大学の法学部卒で、この町で幼少期を過ごしています。「摂氏（英語でセルシウス）」の名を残しているセルシウスは、ウプサラ大学卒の天文学者で、彼の家は今も保存されています。しかし世界に最も名を残したのは、「分類学の父」と呼ばれた植物学者のリンネです。彼

が住んでいた植物園は、ウプサラ大学所管の博物館となっています。植物園は、欧米的な左右対称の設計で整然とした美しさを誇っています。

日本は「文化国家」を目指してアニメ、食文化などの情報発信が目立ってきましたが、郵趣の世界ももっと日本の郵趣情報を世界に発信すべきと今回の旅で痛感いたしました。

〈2019年6月記〉



資料15 リンネ植物園の設計図



写真16 植物採集中のリンネ像の傍に立つ筆者



写真17 一休みで頂いたウプサラの小エビのサラダは、ビールと合って絶品！